

10月4日 年間第27主日

創 2:18～24 ヘブ 2:9～11 マコ 10:2～16

1. マコ

v.2 「ファリサイ派の人々が近寄って、“夫が妻を離縁することは、律法に適っているでしょうか”と尋ねた。」

律法と福音を対比させるという論法で、ユダヤ教は律法主義に陥っていたが、キリスト教は福音によって人々を律法の呪いから解放した(ガラ 3:13)、と主張されることがあります。カトリック教会は、この福音の啓示の伝達をその本質的な使命と理解して来ました(神の啓示に関する教義憲章 7)。

私たちは今朝も、朗読配分によって与えられた聖書のテキストから、福音を聞こうとしているのです。ところがファリサイ派の人々は、“律法に適っているか”という質問をイエスに投げかけました。

たとえば現代の日本人は、法治国家に生活していますから、幼いときから“法律や規則に反することは罪(悪いこと)”であると教えられて育ちました。ということは、法律や規則に抵触しなければ、そのような行為は罪ではない訳です。そういう考え方が、ユダヤ教の時代からずっと続いているということなのです。

キリスト教の世界でも同様で、離婚することは罪、離婚しさえしなければカトリックの教えを守っていることになる、という単純な判断が行われて来ました。特に米国で争われている例では、妊娠中絶は罪だから禁止せよ、同性婚は罪だから合法化するな、などというものもあります。

“離縁”という用語は、ギリシア語でも、また v.4 に言及されている 申 24:1 のヘブライ語でも、夫が妻に対して“権利放棄する”という意味で、奴隷を去らせて解放する(申 15:12)のと同じ意味なのです。「あなたたちの心が頑固(頑な)なので、このような掟をモーセは書いたのだ」と、イエスは言われました。“気に入らなくなっても”(申 24:1)離縁はしないでいることが、頑なな人間にとってはさらに大きな罪であるということです。vv.11-12で“離縁は姦淫の罪である(申 5:18)”と言われている背後に、離縁という不幸に遭遇しなくても、“人は皆、罪を犯して神の栄光を受けられなくなっている”(ロマ 3:23、エフェ 2:3)という現実があることを、私たちは見落としてはなりません。

2. 創

創世記第1章(P資料)に対して、第二章(J資料)は、人間の創造のもう一つの面を描いています。神は土器を造るように“人を形づくり”(2:7)、命の息を吹き入れられました。人は肉であり、従ってプラスの可能性(強さ)と同時にマイナスの可能性(弱さ)を持つ者として創造されたのです。その人(アダム)の体の一部から造られた女は、この両方の可能性を共有するパートナーでありました。

v.24 「こういうわけで、男は父母を離れて女と結ばれ、二人は一体となる。」

結婚は神が定められた最も基本的な男女の結びつきであります。二人は初めから神に聞き従うことも

背くことも出来る“肉”でありました。彼らがその墮罪によってエデンの園から追い出された後も、その罪の現実のただ中で結婚は維持され、女には“すべて命ある者の母となる”(3:20)という希望の名(エバ)が与えられました。

私たちはこのような聖書の記事を、神の救済史のいわば序論として読むべきであって、その救済史の完成であるキリストの福音から切り離して、ただの神話の世界の物語りだなどと思ってはなりません。離婚が罪であると同様に、私たちの現実の世界では結婚生活そのものもまた罪の下にあるのです。イエス・キリストの福音だけが、“罪と死との法則からあなたを解放する”(ロマ8:1-2)ことを、理解して信じましょう。

3. ヘブ

v.1 「“天使たちよりも、わずかの間、低い者とされた” イエスが、死の苦しみのゆえに、“栄光と栄誉の冠を授けられた” のを見えています。」

カトリック教会の絶えることのない確固たる伝承を証するラテン典礼(ローマ・ミサ典礼)様式による私たちのミサ(ミサ典礼書の総則前文1、典礼憲章3)で、私たち信者は“栄光と栄誉の冠を授けられた” イエスを見ているでしょうか。“神の恵みによって、すべての人のために死んでくださった”(v.9)キリストの福音を、確かに聞き取っていると言えるでしょうか。

カトリック教会の御聖堂には、司祭席と祭壇と朗読台という三つの中心がありますが、そのすべてを用いてキリストは会衆と出会ってくださいます。祭壇における御聖体のキリストだけが一人前で、朗読台で御言葉を通して語られるキリストは半人前であるような感覚が、福音に覆いを掛けてしまって(II コリ3:12-18)はいないでしょうか。

「しかし、神に感謝します。あなたがたは、かつては罪の奴隷でしたが、今は(福音を受け入れて)罪から解放され、義に仕えるようになりました。」(ロマ6:17-18) 「罪の支払う報酬は死です。しかし、神の賜物は、わたしたちの主キリスト・イエスによる永遠の命なのです。」(ロマ6:23)

アーメン、ハレルヤ。

10月11日 年間第28主日

知 7:7～11 ヘブ 4:12～13 マコ 10:17～30

1. マコ

今朝の福音の朗読箇所は、(i)v.17-22、(ii)v.23-27、(iii)v.28-30という三つの部分からなっています。それぞれを単独で読むことも出来ますが、少なくとも (i) と (ii) は初めから結びついた一つの伝承として読むのが、適切であるように思われます。

まず、「永遠の命を受け継ぐには、何をすればよいでしょうか」と尋ねた人への、イエスの答を順に見ていきましょう。v.19は十戒の後半部分です。私たち現代のキリスト者と同様に、この人も十戒の前半部分から切り離して、イエスの言葉を受け取ったように描かれています。「先生、そういうことはみな、子供の時から守ってきました。」(v.20) するとイエスは言われます。「あなたに欠けているものが一つある。行って持っているものを売り払い、貧しい人々に施しなさい。」(v.21)

イエスは彼に、十戒の要求以上にさらに高度なもう一つの要求をされたのだと理解してはなりません。ここで欠けている一つのものとは、自分のすべてを神にささげる信仰(ロマ 12:1)、すなわち十戒の前半への全き服従のことでありました。この人が気を落とし、悲しみながら立ち去ったことは、彼にとって善い行いとその富がいわば彼の偶像になっていたことのしるしでありました。

v.23 「財産のある者が神の国に入るのは、なんと難しいことか。」

旧約聖書では、富について二種類の理解が混在しています。一方では富は神の好意のしるしであり、また善い行いへの報いであると考えられ(王上 3:13、イザ 60:5-6)、他方では“貧しい人”を敬虔と、“富める者”を神への反逆と結びつける理解があります(詩 37:11、73:3-12)。しかし、イエスは思いもよらない新しい考え方を示されました。財産のある者には、どうしてもそれを当てにして、もっと大切な全き信仰を軽視する誘惑が大きくなる……。だから恐らく、財産が彼の偶像となるのを避けるために“売り払いなさい”と言われたとき、イエスは十戒の中の第一戒を考えておられたのでしょう。

v.27 「人間に出来ることではないが、神には出来る。」

富について言われていることは、善い行いについても等しく当てはまります。ですから“永遠の命を受け継ぐ”、“神の国に入る”、“救われる”ことは、人間が自力で獲得出来るものではなくて、全く神の賜物である(エフェ 2:8)というのが、v.17-22への解答なのです。

2. ヘブ

“神の言葉”(v.12)とは、神がキリストによって実現してくださった“和解の福音”(II コリ 5:18-21)のことです。この福音に対する私たちの正しい応答は、第一に“信仰”(3:19、4:14)であり、そして“この福音への確信を最後までしっかりと持ち続ける”(3:14)ことです。

10月18日 年間第29主日

イザ 53:10～11 ヘブ 4:14～16 マコ 10:35～45

1. マコ

v.37 「二人は言った。“栄光をお受けになるとき、わたしどもの一人をあなたの右に、もう一人を左に座らせてください。”」

v.39 「彼らが、“できます”と言うと、……」

イエスと弟子たちの旅がエルサレムに近づくにつれて、彼らの間には来るべきメシアの栄光の出現(使1:6、IIテモ4:1)への興奮が高まっていたに違いありません。そのような期待は、原始教会に受け継がれ、そして現代の教会も持ち続けているものです(ロマ8:18-25、Iコリ1:7)。神の国の到来に至る途上での殉教の死さえも含む英雄的な苦難との戦いを、弟子たちは覚悟するようになって行ったものと思われます。ですから、v.37をただの名誉欲による発言であるなどと、安易に考えてはなりません。彼らへのイエスの答は、現代の私たちが抱く“信仰の熱心”への諭しの言葉でもあるからです。

イエスは「わたしが飲む杯」(v.38)という言葉で、罪に対する神の“憤りの杯”(イザ51:17-23)のことを言われ(14:36参照)、「わたしが受ける洗礼」(v.38)という表現で、人間の罪を担い、それに対する神の裁きを受けることを示されました(ロマ8:3)。「わたしには受けねばならない洗礼がある。それが終わるまで、わたしはどんなに苦しむことだろう。」(ルカ12:50)

誰もイエスに代わって、あるいはイエスと共に、この杯と洗礼にあずかることは出来ません。ただ御子イエスだけが、「わたしたちの罪のために死に渡され、わたしたちが義とされるために復活させられたのです。」(ロマ4:25) 私たちキリスト者は、“信仰の熱心”を“自分もキリストのようになること”だと、勘違いしてはなりません。

イエスが「多くの人の身代金として……」(v.45)と言われたとき、それは決して人数や割合のことを言われたものではありませんでした。Iテモ2:6で「すべての人の贖いとして」と言い換えられた場合にも、それは同じことでした。私たちがここで聞くのはただ、「神はこのキリストを立て、その血によって信じる者のために罪を償う供え物となさいました」(ロマ3:25)という一事なのです。信仰の法則は、人間から“信仰の熱心”という誇りさえも取り去るものなのです(ロマ3:27)。

2. ヘブ

v.14 「さて、わたしたちには、もろもろの天を通過された偉大な大祭司、神の子イエスが与えられているのですから、わたしたちの公に言い表している信仰をしっかりと保とうではありませんか。」

御自身、民の罪を償うために、試練を受けて苦しまれたイエスが(2:17-18)、今や神の右の座に着いて、

再臨の日を待ち続けておられるのですから(10:12-13)、“教会が公に言い表している信仰をしっかりと保つ”ということは、司牧者にとっても信徒一人一人にとっても根本的な重要事です。

カテキズムという語は、ギリシア語のカテケーシスに起源し、古代のアフリカ教会に始まった信仰問答書のことです。たまたま宗教改革の影響もあってその重要性が再確認され、カトリック教会でも洗礼志願者の教育のため、また受洗後の信仰生活の指導のため、さらに司教や司祭の司牧の指針として役立てられて来ました。新しく1997年に発刊された“カトリック教会のためのカテキズム”は、現在私たちが手にすることの出来る“唯一で、絶えることのない使徒継承の信仰に関する新しい権威ある解説書”(使徒的書簡／大きな喜びをもって)とされています。

ミサの中の“ことばの典礼”で、司祭が聖書に基づいて説教をするとき、その解釈の指針となるのがカテキズムであり、また古代教会以来の信条であることを、私たちは大切に考えなければなりません。決して司祭の個人的な主観による、カテキズムや諸信条に沿わない“訓話”が、ミサの説教に代えられてはならないのです。今日カトリック教会における“教養ある信徒”には、そのような批判精神を“キリストの体を造り上げて行く”(エフェ4:12)ために捧げ活かして行くことが求められます。

私の出席している浜松教会では、近年は“ことばの典礼”の中で、使徒信条が唱えられるようになりました。これは以前の洗礼式の信仰宣言よりも、格段の前進として喜んで良いことです。しかし現状では、ニケア・コンスタンチノーブル信条が唱えられるチャンスがないことが、やや残念です。

教会を造り上げるのは、教導職だけの仕事ではなくて、それは共にミサをささげる信徒との共同作業なのです(教会憲章32)。ですから信徒たちも司祭と一緒に、「わたしたちの公に言い表している信仰をしっかりと保つ」(v.14)という基本を大切に、「大胆に恵みの座に近づこうではありませんか。」(v.16)

聖書を学ばないで、カテキズムだけを読んでも、使徒継承の信仰を持つことは出来ません。そうではなくて、私たちは聖伝と聖書を学ぶための“権威ある解説書”を与えられていることを、感謝しましょう。

アーメン、ハレルヤ。

10月25日 年間第30主日

エシ 31:7～9 ヘブ 5:1～6 マコ 10:46～52

1. マコ

これはマルコ福音書における最後のいやしの物語りなのですが、マタイおよびルカ福音書の並行記事と読み較べてみると、その描写が際だって生き生きしているのが分かります。恐らくこの伝承が伝えられた教会では当時、信者の間にバルティマイの名がよく知られていたのでしょう。

v.47 「ダビデの子イエスよ、わたしを憐れんでください。」

「ダビデの子」(vv.47,48)という称号は、初代教会が「イエスは救い主である」という信仰の宣言として用いたもので(ルカ 2:11、ロマ 1:3)、共にその救いを受けているという喜び(ヨハ 4:10-11)がこの物語りには溢れているのです。

教会では古くから、ミサの開祭の部分で“あわれみの賛歌”を歌います。これは賛歌というよりは、イエス・キリストに向けられた祈願であって、我が国で拝領前の信仰告白に用いている“主よ、あなたは神の子キリスト、永遠のいのちの糧、あなたをおいてだれのところに行きましょう”と同じ性格のもので、いつの時代にも、人はイエス・キリストに期待する以外には、他の何かを教会に期待しても無意味なのです。しかし、歴史の教会はそれとは別な種類の期待にも応えようとする、いわば脱線と失望を繰り返して来ました。

この物語りが伝えられた原始教会は、「あの男を呼んで来なさい」(v.49)というイエスの声を聞く喜びが共感を呼ぶ会衆の集まりであったということに、私たちは感激すべきなのです。そのような教会によって、「盲人は上着を脱ぎ捨て、躍り上がってイエスのところに来た」(v.50)という生き生きとした描写が伝えられました。

v.51の“先生”は、ヨハ 20:16と同じ“ラボニ”が使われていて、イエスへの信仰の切実さが強調されています。ただ盲目が奇跡によっていやされたという・・・それは大事件であったには違いないのですが・・・過去の出来事以上に、今は救いを受けてキリストと共に生きているという現在の喜びが、この物語りの主題であることに注目しましょう。ですから v.52の「従った」という言葉の深い意味を、私たちは マコ 1:18、2:14、8:34 などとの関連で理解しようではありませんか。

2. ヘブ

v.6 「あなたこそ永遠に、メルキゼデクと同じような祭司である。」

この出典である 詩 110:4 は、「主は誓い、思い返されることはない」という序詞を伴っていて、キリストが大祭司となる栄誉を御自分で得たのではなく(v.5)、父からその務めを与えられたことを示しています。その務めとは、「ただ一度、御自身を献げる」(7:27)ことであり、「恥をもちとわなないで十字架の死を耐え忍び、神の玉座の右にお座りになった」(12:2)ことであります。

“イエスに従う”ということ、私たちがイエスのようになることだと考えるのは、あまり適切なことではありません。信仰というものをそのような形で理解する人々が過去にもいましたし、現在も少なからず存在します。しかし、罪人である人間がどんなに背伸びしても、イエスと同じことを行ったり、まして自分や他人の罪を贖ったりなど出来はしません。

私たちに出来る唯一のことは、イエス・キリストを信じて(ロマ3:22)、その血によって贖われ、罪を赦される(エフェ1:7)ことだけです。“イエスに従う”とは、揺るぐことなく信仰に踏みとどまり、福音の希望に生きる(コロ1:23)ことであり、従って、あなたがたの信仰と希望とは神にかかっているのです(1ペト1:21)。大祭司イエスによる罪と不法の赦しがある以上、罪を贖うための(それ以上の)供え物は、もはや必要ではありません(10:18)。

3. エレ

v.7 「主よ、あなたの民をお救いください、イスラエルの残りの者を。」

私たちにとって救いとは、かつては「異邦人のような罪人」(ガラ2:15)と呼ばれていたのに、今やキリストによって「聖なる民(イスラエル)」に属する者とされた(エフェ2:19)ことなのです。いやされた盲人バルティマイも、救われた徴税人ザアカイ(ルカ19:9)も、今や「神のイスラエル」(ガラ6:16)となりました。

教会憲章31で、“信徒に固有の特質は世俗的特性である”、“信徒は世俗の中に生きている”と述べられていることが誤解されて、宣教は司教と司祭の使命であって信徒の仕事ではない、というように解釈されるなら、それは大間違いです。教会憲章33が“信徒の使徒職は教会の救霊活動そのものへの参与であり”と述べている通り、信徒は世俗の生活の中でこそ“あなたの民をお救いください”、“イスラエルの残りの者をお救いください”と祈る者になることが期待されています。

「しかし、このわたしには、わたしたちの主イエス・キリストの十字架のほかに、誇るものが決してあってはなりません。……このような原理に従って生きていく人の上に、つまり、神のイスラエルの上に平和と憐れみがあるように。」(ガラ6:14-16) ハレルヤ、アーメン。